考えられる）がある。次に土偶の表面を飾る文様を見てみる。最初に節の細かい縄文（原体R）を小さな単位でほぼ全体に施文し，さらにヘラ様工具で沈線，刻みを加えて文様を描いている。沈線はすべて２本を単位に平行に描かれ，土偶を一周するものと弧状を示すものがあり，前者を描いたのち後者を描いている。また平行沈線の間はさらに磨消しが行なわれ，一部沈線が埋まってしまった部分もある。腰から腹部の張り出しへ向って粘土紐を貼り付け刻みを加えている。脚部の下方の足首と思われる部分は非常に浅い沈線が一周している。さらにその下方には正面より見られる範囲にヘラ様工具による刻みが加えられている。

今回採集した土器を分類すると加曽利E式（図２－２），加曽利B式（３～10），安行式(11)，荒海式と思われる土器（12）とに分かれるが，主体は縄文時代後期中葉の加曽利B式の土器群であり，後葉の安行式土器群が続く。中期の土器は少ないことから奈土貝塚は縄文時代後期中葉以降に営まれたことが知れる。

千葉県内で発見される縄文後期の土偶についてみると，前葉の堀之内期でのハート形土偶や筒形土偶の特徴は胴部は割に扁平で，肩から手にかけて見られる渦巻文，刺突列，沈線文をもつ怒り肩，O脚に開いた脚などが一般的である。中葉の加曽利B式期での山形土偶は三角の頭，T字形の眉毛と鼻，寄り目がそのおもな特徴である。後葉の安行期でのミミズク土偶は，顔はミミズクに似ており，背面に入組文や三叉文をもつのが特徴である。

ここで紹介した土偶は下半身のみで，特徴が見られる上半身を欠いている。そこで全容が知れる他の土偶との比較をしてみる。昭和32年の調査で出土したミミズク土偶と比較すると脚の造りやその文様の描きかたに大きな違いが見られ，伴出した土器も安行式が多く，今回と様相を異にしている。またハート形土偶や筒形土偶ともその特徴を異にしている。そこで山形土偶の類例を捜すことにすると，佐倉市吉見台遺跡出土の土偶と非常に類似していることがわかる。現存する部分も全く同じなのである。加曽利貝塚出土の山形土偶の下半身が発達している様子とも類似している。そしてこの山形土偶はミミズク土偶とともに本県でも普遍化した土偶であることが知られている。

奈土貝塚出土の縄文時代後期中葉以降の土器群と，本土偶の特徴から考えると，本県と茨城県にその分布の中心をもつ山形土偶としてよいであろう。また本土偶では腰の部分で割れているが，割れた面は少々磨滅して丸味を帯びているが，全く同様な状態で佐倉市吉見台遺跡から出土している例もあり，今後の資料の増加を望むものである。

最後に，この土偶を発見し，当方に遺物を託された宝田みつさんに謝意を表します。

（６班・東関道事務所）

奈土貝塚所在地：千葉県香取郡大栄町奈土字稲荷前

**参考文献**

早稲田大学高等学院歴史研究部『千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書』（早稲田大学高等学院史学研究誌第１号）昭33
西村正衛「千葉県香取郡奈土貝塚」『日本考古学年報10』昭38
市立市川博物館『千葉県の土偶』『市立市川博物館図録９』昭45

# 房総半島における方形・円形周溝について

金　丸　　誠

## I

近年，千葉県下の内陸部地域を中心に方形乃至は円形に溝が巡り、他に付随する遺構が検出されず，又、出土遺物も総じて希少な遺構の報告例が増加している（挿図２・３）。従来、方形のものが多い事もあり、それらは方形周溝墓・方形周溝・方形周溝遺構、或は古墳として○○号墳という名称で呼ばれてきた。性格については「墓」という

点においては共通しているが、具体的な性格づけが不充分のままである。

これは，各地域で徐々にこれらの遺構について問題視されつつあるものの、体系的に追求される事なく、各報文中において問題提起といった段階に終始している点にあるかと思う。ここでは先ず現在県下において正式に報告されている例を集め，その分布と時期及び各報文中に述べられている性格に対する検討と、若干の私見を述べてみたいと思う。

尚，本文中においては、方形周溝・円形周溝という名称で統一しているが、便宜的に使用するものであって、本来もっと適切な名称が与えられるべきであると思う。

II

現在正式に報告されている方形・円形周溝は80余例を数え，未報告で管見にふれる例を加えれば100例を越えるものと思われ，今後更に類例は増加していくものと思われる。ここでは先に述べた通り報告済みの例について対象とする事にする。

県内北部から順に述べてみると。

1，小見川町　阿玉台北遺跡（註1）　方形周溝3基・円形周溝4基

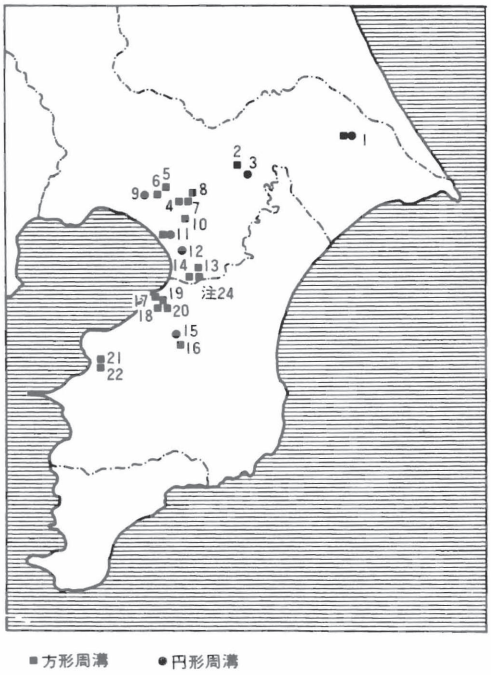


図1　方形・円形周溝分布図

2，成田市　公津原Loc. 9遺跡（註2）　方形周溝2基

3，富里村　日吉倉遺跡（註3）　円形周溝3基

4，佐倉市　生谷遺跡（註4）　方形周溝8基

5，佐倉市　西ノ台遺跡（註5）　方形周溝1基

6，　〃　萱橋遺跡（註6）　方形周溝3基

7，　〃　生谷境堀遺跡（註7）　方形周溝2基

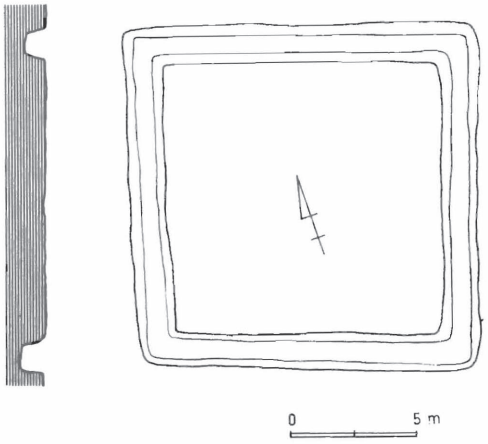


図2　ムコアラク遺跡1号方形周溝

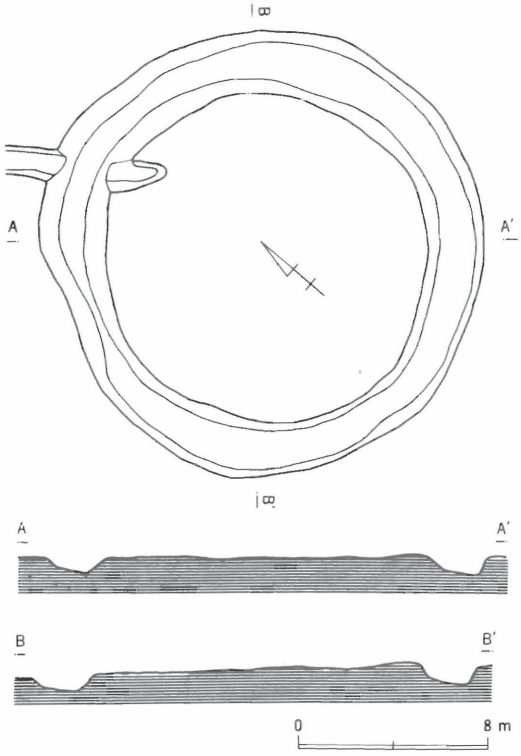


図3　兼坂遺跡第4号円形周溝

8，　〃　飯重新畑遺跡（註８）　方形周溝２基
9，八千代市　村上込の内遺跡（註９）　円形周溝１基
10，四街道市　千代田遺跡（註10）　方形周溝７基
11，千葉市　すすき山遺跡（註11）　方形周溝９基・円形周溝１基
12，　〃　兼坂遺跡（註12）　円形周溝２基
13，　〃　千葉県立コロニー内遺跡（註13）　方形周溝11基
14，　〃　ムコアラク遺跡（註14）　方形周溝６基
15，市原市　土宇遺跡（註15）　円形周溝３基
16，　〃　千葉・南総中学遺跡（註16）　方形周溝１基
17，　〃　台遺跡（註17）　方形周溝１基
18，　〃　諏訪台古墳群（註18）　方形周溝６基
19，　〃　長平台遺跡（註19）　方形周溝４基
20，　〃　西広貝塚（註20）　方形周溝１基
21，木更津市　大山台遺跡（註21）　方形周溝５基
22，　〃　請西遺跡（註22）　方形周溝２基

以上９市町村において総計で方形周溝が74基，円形周溝が14基を数える事ができ、現在の段階では方形周溝の方が圧倒的に多く検出され，佐倉市・千葉市・市原市において多く分布している（挿図１）。北は小見川町阿玉台北遺跡で利根川の南岸にあり、未だ茨城県においては同種の遺構の発見例を聞かない事から，利根川が北限となっている様である。南は木更津市請西遺跡で小櫃川の南方の小河川矢那川の南岸に位置し、現在のところここが南限となっている。安房郡・外房地域及び東葛地域においてはみられず，総じて南北に細長い分布状況を示している。立地条件をみると支谷に面する台地上に位置する割合が比較的多く，主要河川の流域部よりもやや内陸部に入った地点に位置している。

III

次にこれらの遺構の帰属する時期についての問題であるが，概して時期を明示し得るにたる遺物を共伴する遺構が少ない。それ故に多くのものが，その報文中において時期・性格不明とされるのもやむを得ない所である。

先に挙げた遺跡のうち全体の形状をうかがい知ることができ、時期を知る手掛りとなる遺物を共伴している遺構を列挙し，その示す時期について述べてみたい。

小見川町阿玉台北遺跡Ａ－012号（円形周溝）からは土師器甕形土器１点が出土し，古墳時代後期前半頃に帰属するものと思われる（挿図４－１）。

佐倉市生谷遺跡Ａ－３号（方形周溝）からは須恵器長頸壺１点、須恵器杯１点が出土しどちらも８世紀後半代に帰属するものと思われる（挿図４－2･3）。生谷境堀遺跡１号（方形周溝）からは須恵器杯３点が出土しいずれも８世紀後半代に帰属するものと思われる（挿図４－４～６）。

四街道市千代田遺跡３号（方形周溝）からは須恵器甕１点が出土し，６世紀中葉頃に帰属するものと思われる（挿図４－７）。同４号（方形周溝）からは須恵器長頸壺１点が出土しているが，口縁部から頸部までしか遺存しておらず，これだけを以って時期を判断するのはやや危険かとも思うが，一応９世紀中葉頃から後半代に帰属するものと思われる（挿図４－８）。

千葉市兼坂遺跡３号（円形周溝）からは土師器甕形土器１点（挿図４－９）が，４号（円形周溝）からは土師器杯形土器２点（挿図４－10・11）が出土しており，ともに古墳時代後期前半頃に帰属するものと思われる。千葉県立コロニー内遺跡011号（方形周溝）からは須恵器盤状杯１点が出土しており，８世紀末から９世紀初頭頃に帰属するものと思われる（挿図４－12）。ムコアラク遺跡２号（方形周溝）からは土師器杯形土器１点と須恵器長頸壺１点が出土しており，ともに８世紀中葉から後半頃に帰属するものと思われる（挿図４－13・14）。

市原市土宇遺跡３号（円形周溝）からは土師器坩形土器１点が出土しており，口縁部の中央部に鍔状の稜帯がみられ，鬼高式土器の古相を呈するものと思われる（挿図４－15）。千葉・南総中学遺跡Ｈ－17号墳（方形周溝）からは土師器椀形土器１点・甕形土器１点が出土しており，いずれも古墳時代後期に帰属するものと思われる（挿図４－16・17）。台遺跡Ｂ地点２号墳（方形周溝）からは須恵器長頸壺１点が出土しており７世紀前半代に

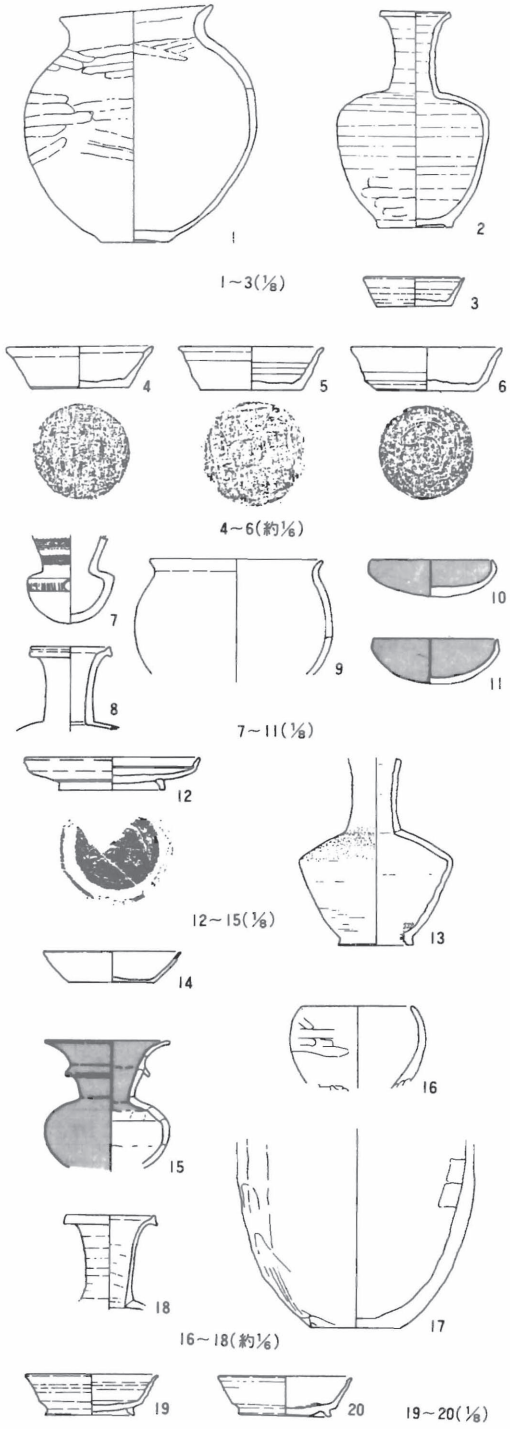


**図4**　方形・円形周溝出土遺物集成

帰属するものと思われる（挿図4－18）。

木更津市請西遺跡A－1号（方形周溝）からは須恵器高台付杯形土器2点と他に剣形石製品1点・双孔円板1点が出土しており，須恵器高台付杯形土器の時期は8世紀後半から9世紀初頭頃に帰属するものと思われる（挿図4－19・20）。

以上の12の遺構を挙げることができる。これらの遺物の示す時期が即遺構の時期を示すものばかりとは限らないが，その出土状況等を見ると，おおむね一致するものと考えて良かろうかと思われる。これらのうち6世紀代（古墳時代後期前半頃）の遺物を共伴するものは，阿玉台北遺跡A－012号（円形周溝）・兼坂遺跡3号（円形周溝）・千代田遺跡3号（方形周溝）・土宇遺跡3号（円形周溝）である。7世紀代の遺物を共伴するものは，台遺跡B地点2号墳（方形周溝）だけであり，8世紀代の遺物を共伴するものは，生谷遺跡A－3号（方形周溝）・生谷境堀遺跡1号（方形周溝）・ムコアラク遺跡2号（方形周溝）・同3号（方形周溝）である。8世紀末から9世紀代の遺物を共伴するものは，千代田遺跡4号（方形周溝）・千葉県立コロニー内遺跡011号（方形周溝）・請西遺跡A－1号（方形周溝）である。8世紀代から9世紀代の遺物を共伴する遺構は7基を数え，数量的には最も多い。又，各報文中に図示不可能な遺物としながらも，それらから推測し得る時期を奈良・平安時代或は国分期とする各調査者の見解もみられ，これらの遺構の中心的な時期を8世紀代から9世紀代に置くことが許されるものと思われる。6世紀代の遺物を共伴する4基のうち千代田遺跡3号を除き，他は円形周溝であることが注目される。現在円形周溝は方形周溝に比べ数量的には少ないが，その数少ない円形周溝に共伴する遺物が，6世紀代の遺物であり，最も古い時期の一群を占めていることは，単なる偶然や資料性の問題だけでなく円形周溝が方形周溝に先行して存在しているという事実を想定し得るものと思われる。このことは，杉山晋作氏の言われる，房総において7世紀代に入って方墳が再利用されるという後期古墳の様相に一脈通じるものがあるのではないだろうか(註23)。

## Ⅳ

最後に，報文中においてその性格についての考

察がみられる主なものを挙げ，それらに対しての若干の私見を述べてみたい。

この種の遺構の正式な報告例は，すすき山遺跡が最も古く，その中で後藤和民氏は予察において，「墓壙は発見されないものの，かつては低い墳丘をもち，その中に数体の遺体が浅く埋納され一般庶民の家族墓的な存在であった可能性がある。」とし，早くも古墳とは異なった古墳時代末期の家族墓としての性格を明示されている。しかし，この段階では具体的にこれを裏づける資料に乏しく推論の域を出ず，又「一般庶民」とは古墳時代末期にあってどういう性格づけをされているのか不明であり，疑問を抱かざるを得ない。

生谷遺跡においては，３号周溝の遺物の年代観（報告者は10世紀代以降としている）や諸々の状況から推して，方形周溝墓や古墳の墳丘の除去されたものとは考え得ないとし，本地点からは「該期の生活跡が全く発見されず，（中略）生活に密着する構造物ではなくむしろ別の精神生活的側面を有しているもの」としながらも墓的性格として断定することを避け，それに類する性格であったとしている。

千葉県立コロニー内遺跡においてはその報文中で，他に４例ほど県下の方形周溝の報告例を挙げ，「具体的な時期・性格について確証を得た例は未だ聞かない」としながらも，「規模・主体部の形態等に関係する多くの証左が必要である」としたうえで，方墳としての性格を可能性として挙げられている。更には方形周溝墓との関連についても検討する必要性を指摘されている。ここでは条件つきながら基本的には方墳（古墳）に属するものと考えているが，本遺跡においては，方形周溝11基のほかに方墳１基と横穴式石室構造をもつ方墳１基が検出されており，時期的にはすべて共通することから，このように考えているものと思われるが，相対的な数の比率から考えてみてもやや無理があるように思われる。

ムコアラク遺跡においては，その報文中の冒頭で１号・２号方形周溝を「古墳の内部施設設置前の状況のものであるとすれば……古墳として取り扱うべきである」としながらも，まとめの段階では同じ１号・２号方形周溝を「破壊された古墳の周溝である可能性が強い」とやや矛盾した意見を述べられている。又，他の方形周溝についても破壊された古墳の周溝の可能性を強調し，「墳墓に周溝を巡らすという遺風があったという前提下での古墳的遺構の残骸」という性格を付されている。ここで述べている「墳墓に周溝を巡らすという遺風があった」とする時代設定がいつ頃なのか，又「古墳的遺構」というものがどのようなものを想定しているのか，やや不明な点が多い。

このほかのものは，方形周溝墓とはその年代観・規模・形態等において異なる点を挙げ，古墳の周溝としているものか，或は規模が小さく不明としているものがほとんどである。

以上みてきたように，その性格づけにやや具体性の欠けるものはあるが，おおかたは「墓」という認識において共通する。これは，ここに挙げた例が生谷境堀遺跡において指摘されているが如く，各遺跡において該期の遺構として住居跡等の生活跡と複合して検出される例が少なく，ほとんどが方形周溝・円形周溝だけか，古墳と複合して検出されていることからも逆に裏付けられる。

時期的には先にみたように，古墳時代後期前半（６世紀中葉頃）から歴史時代（９世紀前半頃）の約300年にわたり，中心的な時期は８世紀代にある。

規模においては，方形周溝で最小のものは四街道市千代田遺跡５号の3.7×3.4m，千葉市すすき山遺跡５号の3.7×3.5mで，最大のものは市原市千葉・南総中学遺跡Ｈ－17号墳の約18.5×16.5mである。平均的には１辺が６～８ｍ内外におさまる。円形周溝では最小のものは千葉市すすき山遺跡４号の径4.5ｍで，最大のものは千葉市兼坂遺跡２号の径19mである。

マウンドに関しては，生谷境堀遺跡においてやや不明確ながらその存在が報告されている以外は，明確な例はない。規模が10数ｍ以上に及ぶものは別としても，ほとんどのものが６～８ｍ内外のものであり，仮にこれらにマウンドを築いたとしても，その規模・高さには自ずと限界が生じる。すすき山遺跡において後藤氏が言われるように，あっても低いマウンドであり，後世の耕作によっても容易にその存在が消滅する程度のものであったと思われる。この場合マウンドを耕作等によって完全に削平され，主体部がマウンド内に構築されていたものと区別がつかなくなるという疑問が生じてくる。しかし，それは先ずその規模において

区別し得るし，ここでは具体的に明示しなかったが，周溝の形態において古墳と方形・円形周溝とは異なる点があり区別は可能であると思う。又古墳のそれの場合地元の人の話によってかつてマウンドが存在していたことを確認し得る場合がある。

主体部については，やはり後藤氏の言われるように，地山に痕跡を残さない程度のものであったと推定したい。又，周溝の埋没過程が自然堆積と思われるものが多いなかにあって，生谷境堀遺跡1号（方形周溝）の遺物出土地点周辺部が人為的な埋没の状況を示している例から，周溝内側の台状部だけでなく周溝内も埋葬部として機能していた可能性が考えられる。

ここで一応この種の遺構について，古墳時代後期から歴史時代における，明確な形状での埋葬主体及びマウンドを遺存しない方形ないし円形状の溝からなる墳墓的遺構であると規定し，当該期における墓制の一形態としてとらえたい。ここで言う墳墓とは通常いわれる高塚古墳を指すもので，墳墓的遺構とは横穴と同じ概念で考えている。

## V

はじめにも述べたように方形・円形周溝は正式報告済みのものだけでも80例を越え，今後更に類例は増加していくものと思われる。ここでは，これらの遺構に対して，独立した1つの性格を付そうとしたものであるが，不充分なまま終わってしまったことは否めない。又，ここでは方形周溝と円形周溝とを一応同じに扱ってきたが，その初源的な問題も含めて，その形態的な差異のもつ意味についても考えていく必要があることはいうまでもないことである。更にこれらを古墳時代後期から歴史時代にあっての墓制の一形態とした以上，古墳特に終末期の古墳との関連や横穴等の対比を行っていかねばならない。今後はこれらを踏まえ，より具体的な検討を通してそれらを明らかにしていきたいと思う。

（3班・萱田事務所）

**註**

1）矢戸三男他『阿玉台北遺跡』昭50
2）天野努『公津原II』昭56
3）滝口宏他『遺跡日吉倉』昭50
4）田川良『生谷』昭52
5）米内邦雄他『佐倉市埋蔵文化財報告2—志津西ノ台遺跡—』昭51
6）註5に同じ。
7）桑原護『飯重』昭49
8）註4に同じ。
9）天野努『八千代市村上遺跡群』昭49
10）米内邦雄・宮入和博『千代田遺跡』昭47
11）千葉市史編纂委員会『千葉市史—すすき山遺跡』昭49
後藤和民・庄司克「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」『貝塚博物館紀要第5号』昭47
12）栗本佳弘他『京葉—兼坂遺跡』昭48
13）菊池真太郎・豊田佳伸『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』昭51
14）田坂浩・白井久美子『千葉東南部ニュータウン8』昭54
15）日本文化財研究所『千葉県市原市土宇遺跡発掘調査報告』昭54
16）南総中学遺跡調査団・市原市教育委員会『千葉・南総中学遺跡』昭53
17）上総国分寺台遺跡調査団・千葉県市原市教育委員会『上総国分寺台発掘調査概要III』昭51
18）上総国分寺台遺跡調査団・千葉県市原市教育委員会『上総国分寺台発掘調査概報』昭57
19）註18に同じ。
20）上総国分寺台遺跡調査団・千葉県市原市教育委員会『上総国分寺台発掘調査概報』昭56
21）千葉県木更津市教育委員会・木更津市請西遺跡調査会『請西—千葉県木更津市請西遺跡発掘調査報告書』昭52
22）種田斎吾他『木更津市請西遺跡群—予備調査概報』昭49
23）註3に同じ。
24）千葉市大膳野北遺跡においても同様の方形周溝2基が検出されており，本例を見落していたのでここに付記したい。尚，共伴する遺物はなく，これにより方形周溝の総数は76基になる。
白石浩『千葉市大膳野北遺跡—千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』昭57